

## 地域産業資源を活かしたビジネス開発と絹織物文化の再興を 考える

～甲斐絹文化の地域産業史的研究と織物産業ネットワークの形成のために～

### <研究代表者>

黒羽 雅子 山梨県立大学 国際政策学部

### <共同研究者>

斉藤 秀子 山梨県立大学 人間福祉学部

波木井 昇 山梨県立大学 国際政策学部

古屋 祥子 山梨県立大学 人間福祉学部

渡邊 幸示 山梨県 産業労働部 地域産業振興課

五十嵐 哲也 山梨県富士工業技術センター 繊維部

秋本 梨恵 山梨県富士工業技術センター 繊維部

前田 市郎 (株)甲斐絹座、(株)前田源商店

田辺 丈人 (株)甲斐絹座、(有)田辺織物

長田 武生 (株)山梨中央銀行 営業統括部 公務・地方創成室

武藤 拓路 (株)山梨中央銀行 営業統括部 公務・地方創成室

杉山 茂 杉山江見堂

黒羽ゼミ生等 19 名 (同)飯田甲斐絹堂 学生組織

## 目 次

1. 研究の概要 .....	1 4 0
2. 研究活動実績 .....	1 4 2
3. 産業史関連の研究の進捗状況報告 .....	1 5 4
4. 平成28年度研究活動の評価と今後の課題 .....	1 5 7

## 1. 研究の概要

### (1) 研究テーマ

地域産業資源を活かしたビジネス開発と絹織物文化の再興を考える  
 —甲斐絹文化の地域産業史的研究と織物産業ネットワークの形成のために—

### (2) 研究者

研究者氏名	所属	分担
<u>研究代表者</u> 黒羽 雅子	国際政策学部総合政策学科	(統括・地域史・ビジネス開発)
<u>共同研究者</u> 斉藤 秀子	人間福祉学部福祉コミュニティ学科	(服飾・商品開発)
波木井 昇	国際政策学部総合政策学科	(地域ネットワーク開発・教育開発)
古屋 祥子	人間福祉学部人間形成学科	(デザイン・商品開発)
渡邊 幸示	山梨県産業労働部地域産業振興課	(事業支援・地域ネットワーク開発)
五十嵐 哲也 秋本 梨恵	山梨県富士工業技術センター繊維部	(絹織物産業復活・地域ネットワーク開発、教育開発)
前田 市郎	(株)甲斐絹座、(株)前田源商店	(地域産業調査、教育開発)
田辺 丈人	(株)甲斐絹座、(有)田辺織物	(同上)
長田 武生 武藤 拓路	(株)山梨中央銀行営業統括部公務・地方創成室	(地域ネットワーク開発、事業化支援)
杉山 茂	杉山江見堂	(新商品開発研究・製作)
黒羽ゼミ生等 19 名	(同) 飯田甲斐絹堂 学生組織	(ビジネス開発、調査)

### (3) 研究の背景と目的

幕末から明治期の第1・2次産業革命期に端を発する産業遺産群の世界遺産登録をきっかけに、日本はどのような道筋をたどって今日のような近代化・工業化を遂げたのかという問題意識の高まりをみせている。とりわけ、明治期以来の産業発展の歴史を地域振興の視点から解明し、地域の資源として見直そうという取り組みが広がっている。日本の産業発展は、その過程で大規模な企業経営を生み出すとともに、日本各地に伝統産業・地場産業を形成してきた。とりわけ、日本各地に生まれた地場産業の多くは、伝統技術の蓄積を通じて、その地域ならではの産業基盤を形成し、その地域独自の文化を生み出してきた。

山梨県の近代産業という場合、郡内地域を中心とした製糸・絹織物産業の発展が注目される。この研究は「地域資源を活かしたビジネス展開の可能性について―甲斐絹の伝承と発信のためのプログラム開発―」として地域研究交流センター研究として2009年度以来継続してきた事業を、今年度は産業史研究と郡内地域の絹織物復活へのムーブメントとのコラボレーションという課題を付け加え、あらたな形で継続発展させることを目的として出発した。

当該事業はこれまで、伝統の継承と発信として、大学および高校における甲斐絹に関する講義や家庭科などの教育プログラムの開発と実施、復刻甲斐絹のビジネス化を手掛ける合同会社の設立や海外への発信などの分野で一定の成果を上げてきた。こうした成果の上に立って、産業調査や地域の絹織物業の担い手らとの人的ネットワークを形成するとともに、甲斐絹を中心とする当該地域の文化のさらなる発掘と絹織物産業の今後を展望するような研究を今後数年かけて進めていくというのが、取り組みの目的である。

### (4) 研究の方法と手順

研究会開催等により、具体的な研究内容及び進め方を検討していくこととした。今年度の研究は、甲斐絹による新製品の開発研究と地域のクリエイターとのコラボレーションを図るという意図のもとに、研究代表者を含む県立大学3教員による、開発研究と地域クリエイターとの協働による試作品の完成を経て、研究参加者による合評会、ブランディングのための勉強会を継続していくこととした。

また、地域産業史研究については、富士工業技術センターのこれまでの取り組みを参考に、文献等の収集と分析、現在の状況について実際に現地調査を実施して把握するとともに、学生による甲斐絹の伝承を支援する活動にも取り組んだ。ビジネス展開に関しては、合同会社飯田甲斐絹堂による甲斐絹の認知を広める活動、甲斐絹を通じた地域とのコミュニケーションを深める活動に取り組んだ。

さらに、当該プロジェクトから生まれた合同会社飯田甲斐絹堂による、甲斐絹ビジネスの強化のための研究を進めるとともに、甲斐絹の用途や消費の拡大を通じ、山梨県産

繭の継続的生産を支援する仕組みを生み出す活動に取り組んだ。

これら研究の到達点、事業の成果については今年度末の成果報告書にまとめ、公開に付す。

#### (5) 研究の地域貢献

前述の通り、今年度の当該研究には郡内地域の絹織物復活へのムーブメントとの連携および県内クリエイターとのコラボレーションという課題への取り組みを通じて、甲斐絹という地域資源、伝統文化を生かしたビジネス開発という従来の取り組みをさらに深掘する活動に取り組むことができた。

その成果の一部として、富士川町で創業 100 年を超える杉山江見堂の杉山茂氏と本研究とのコラボレーションによる甲斐絹扇子・団扇の開発と試作品を完成し、これを題材にした、ブランディングと学外の研究参加団体による支援の取り組みを実現した。これにより、甲斐絹の用途の拡大、および甲斐絹の知名度の向上、県内養蚕業の保護という地域の課題に取り組み、微弱ながらも大学として、地域との連携と地域への貢献に取り組むことができた。

#### (6) 研究経費

山梨県立大学地域研究交流センタープロジェクト研究の経費による。

## 2. 研究活動実績

### (1) 予備研究活動

全体研究会に先立って、研究代表者を含む 3 名の学内共同研究者（黒羽、斉藤、波木井）により、県内クラフト作家の実態把握を行い、甲斐絹とのコラボレーション可能な製品の検討に入った。その結果、富士川町杉山江見堂の杉山茂氏の扇子・団扇の制作と甲斐絹プロジェクトとの協働が可能かどうかという働きかけを行った。実際に甲斐絹を杉山氏の工房に持ち込み、扇子・団扇への使用可能性について、検討してもらい、2016 年 11 月初めに甲斐絹団扇の完成、同月中旬に甲斐絹扇子の完成を見た。

学内の研究者と杉山氏による、試作品の検討会を経て、研究会参加者に合評会の開催を呼びかけ、第 1 回研究会を開催することとなった。

### (2) 研究会

#### 第 1 回全体研究会

日時：2016 年 12 月 8 日（木）午後 4 時 30 分より

場所：山梨県立大学地域研究交流センター研修室（A 館 6 階）

参加者：黒羽、斉藤、波木井、渡邊（山梨県）、前田（甲斐絹座）、田辺（甲斐絹座）、長田（山梨中銀）、武藤（山梨中銀）、杉山（杉山江見堂）、渡辺（県外）、瀧口（甲斐絹堂）、大塚（甲斐絹堂）、佐川（甲斐絹堂）、渡邊（甲斐絹堂）

内容：

1. 今年度 11 月までの活動報告

① 合同会社飯田甲斐絹堂の今年度の活動について報告された（富士吉田見学 2 回、山梨県地場産業センター（かいてらす）地場産業まつりへの参加(2 回)、甲斐絹学習会（1 回））

② 甲斐絹扇子、団扇の制作について経緯が説明された。

2. 甲斐絹使用「団扇と扇子」お披露目と合評会

① 発案の学内メンバーによる甲斐絹団扇・扇子の紹介と、制作者の杉山氏による甲斐絹団扇の特徴、制作上の困難や工夫などについて説明があった。

② 合評会では、本製品の評価及び改良点などについて討議するとともに、今後どのような売り方をしていくかについて議論した。その結果、山梨中央銀行の支援を得て、杉山江見堂の製品として、販売していくという方向性に合意がなされた。

3. 今後の予定

その上で、この製品のブランディングの取り組みをより精緻なものにしていくという考え方から、次回研究会では、共同研究者全員で、ブランディングの手法を学び、本年度の取り組みを今後につなげていくこととした。

合評会風景



## 甲斐絹の扇子と団扇



### 第2回研究会

「甲斐絹プロジェクト 2016 講演とワークショップの集い  
台東デザイナーズビレッジ流ブランド育成を学ぶ」

日時：2017年1月27日(金) 午後3時～6時半

場所：山梨県立大学 A館3階被服学実習室

出席：杉山江見堂 杉山

和工房のあ 遠藤

甲斐絹座 前田、田辺

富士工業技術センター 秋本、五十嵐

山梨中央銀行 武藤

飯田甲斐絹堂(学生) 大塚、前田

山梨県立大学 斉藤、波木井、黒羽

プログラム：

1. 講演 台東デザイナーズビレッジ村長 鈴木淳先生

概要：

①「台東デザイナーズビレッジーモノマチのスタートと運営」と題して、台東デザイナーズビレッジの設立経緯、設立後の活動、成功の要因、現況などについて幅広い紹介があった。

②「ブランドを成長させるポイント」と題して、ブランド作りの理論的側面について講演があった。

主な内容としては、ブランド成長には10を超えるステージあり、各クリエイターが陥る悩みや間違いなどの事例が紹介された。また、ブランドが育たない理由をあげ、ブランド作りとは「ファンを育てること」であり、戦略を立てて、ビジネスを組み立てる必要がある。そのうち特に重要なのは、物自体の価値を越えた「イメージ価値」打ち立てることである。ブランドの価値はファンの数であり、ブランドへの認知度と好意をステップを踏んで上げていくような行動を促す必要がある。こうしたファンを育てるプロセス（探す、伝える、動かす、つながる）を知り、商品のミッション・コンセプトを明確化し、目標と計画をもって攻めの仕事をしていくことが必要だ。

講演風景



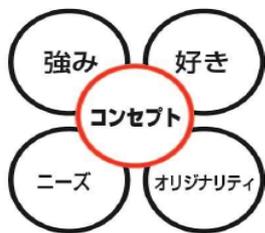
講演スライドの一例

## ブランドが 育たない理由は

### ブランドが育たない理由

- 1) ブランドを育てるプロセスを知らない
- 2) ミッション・コンセプトが弱い
- 3) 感情に振り回される
- 4) 目標があいまい・受身の仕事

## ブランドコンセプトの決め方



どうやって  
お客様を  
共感してもらうか  
選んでもらうか

2. ワークショップ（鈴木淳先生）：「甲斐絹団扇、扇子」のブランディングに向けて 発せられた問、ヒント、交換された意見。

- ① どのお客様をターゲットとするのか
- ② 多くの選択肢の中からどうやって選んでもらうか
- ③ 商品力、背景、作家、着用シーン<——情報発信（商品以外の情報）
- ④ 甲斐絹の魅力を知っている人を増やす（価値を感じてくれる人のところに行く。歌舞伎、西鶴、お城好き

甲斐絹のファンを増やす。魅力を伝える。それぞれ見た人が感動できる。Twitter で発信し続ける。何かを好きな人たちのグループ。お客様のイメージ：和服を着る人たち、生地の良い分かる人、日本のものにこだわっているひと、山梨県を売り込みたい人、山梨好き、トレーサビリティ（人と地域、つながりで売る）

入門（お客様を増やすための商品、知名度）

初級品（数を増やす）

中級品（定番品 高級品（イメージアップ）お客様を育てる。

甲斐絹の扇子を開くたびに山梨の魅力を伝えてください。

甲斐絹をプレゼントしたらいい。なぜ、甲斐絹か。歴史の中で語る。

甲斐絹の知名度を高めて、ファンを増やす。（写真、風景＋甲斐絹、歴史ファン＋甲斐絹、文章＋甲斐絹、洋服）

中銀の頭取、学生が山梨出身の社長に営業をかける（山梨県のために。どうやって売ったらいいのか聞いてみる。県人会。）京浜富士川の会（中銀の頭取）巻き込む（自分事にしてもらおう。もらう代わりに売り込みを担ってもらおう。フェイスブックで紹介してもらおう、売り方を教えてくださいと頼む。）媒体。

売る場面をたくさん作り、次のステップを考える。自分の力で売る。

ネバーランド（セーラー服のようなもの、ファンづくり、感謝イベント、販促ツール）

3 倍の価格で売るためにはどうしたらよいか考える。

製作工程を取材してもらおう。

以上を受けて、各参加者から本日のワークショップへの参加の感想と、今後への抱負

について発言してもらい、第2回研究会を終了した。

ワークショップ風景



(3) 活動記録（合同会社飯田甲斐絹堂主催の甲斐絹普及活動等）

① 2016年8月12日 富士工業技術センター訪問(参加者6名)

同センター繊維部 技術支援科の五十嵐哲也氏による「ヤマナシ産地概論」と題する甲斐絹関連の歴史と産業・文化に関するレクチャーを受け、甲斐絹の標本原本を見せていただくと同時にその柄の意味などについて説明を受けた。

② 2016年9月1日 榎田商店、甲斐絹座ショールーム及び田辺織物工場見学（参加者5名）

㈱甲斐絹座社長の前田市郎氏より榎田商店（甲斐絹の生産、在庫管理）と甲斐絹座ショールームにおいて、甲斐絹生地及び、甲斐絹座により開発された商品、海外から評価を受けた商品などについて説明を受けた。

さらに、田辺織物の工場で、甲斐絹座メンバーでもある田辺丈夫氏よりジャガード織の工程について、詳しい説明を受け、織物の出来上がるまでの実際を学んだ。



## 田辺織物



- ③ 2016年9月12-13日開催 山梨県地場産業センター（かいてらす）地場産業まつりへの（ブース）参加

甲斐絹名刺入れ、甲斐絹カードケース、甲斐絹柄ミニノート、甲斐絹小物などの商品を展示するとともに、甲斐絹堂および甲斐絹プロジェクトの活動を宣伝するパンフレットの配布などを行った。

展示風景



- ④ 2016年11月5日 本学大学祭で甲斐絹製品および試作品の団扇を展示。  
同時に、甲斐絹に関するアンケートを実施し、概ね好感を持って受け止められていることを確認した。

受付風景



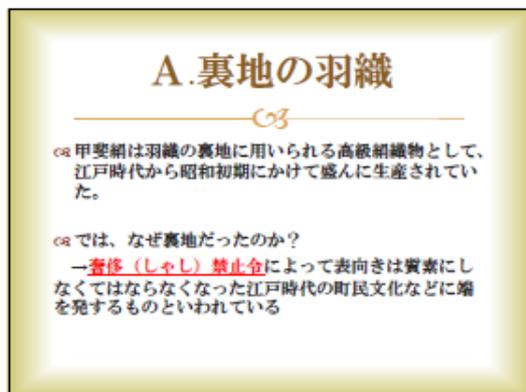
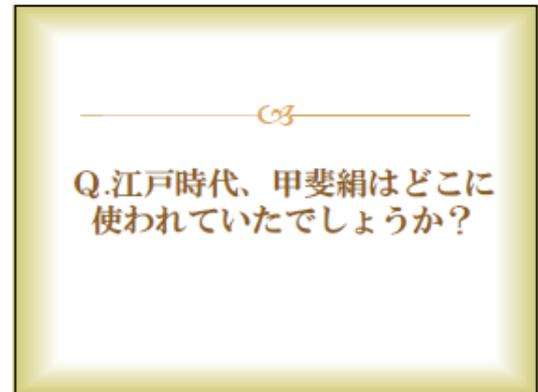
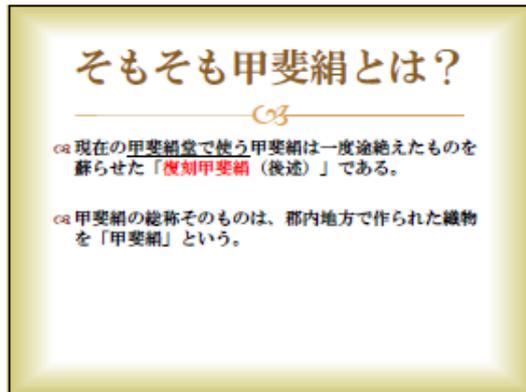
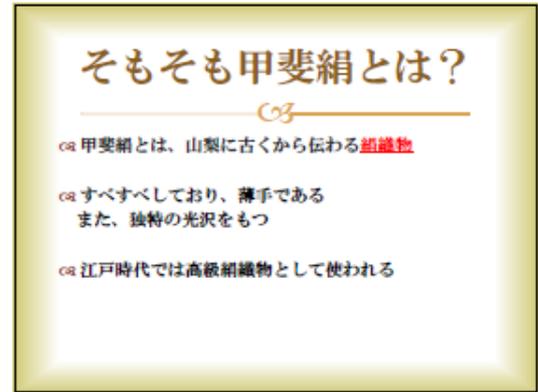
展示品



⑤ 合同会社飯田甲斐絹堂による甲斐絹学習会の開催

(1)2016年8月2日実施分資料

テーマ：甲斐絹について（担当：大塚郁弥）



〰〰〰

## ここからは甲斐絹の 特徴をひとつずつ

## 先練り（さきねり）

〰〰〰

一生糸\*から不純物を取り除く工程で、生糸の状態で行うのが、先練り。

一ちなみに、白生地に織ってから不純物を取り除くのを後練りという。

生糸\*・・・蚕の繭糸を何本か抱合させて1本の糸にしたもの

## 先染め（さきぞめ）

〰〰〰

ca 糸から生地へ織る前に、糸を染める。

## 無撚り（むより）

〰〰〰

ca 通常、織物は糸の強度をつけるために糸に撚りを施すが、手織りである甲斐絹はそれをほとんどしない無撚りの糸を使う。

ca ちなみに復刻甲斐絹は機械織りのため少し撚りかけた甘撚りである。

〰〰〰

Q.撚りってなに？

〰〰〰

A.ねじること

## 細番手 (ほそばんて)



- ☞ 甲斐絹は、たて糸が14～21中2本  
よこ糸が21～27中2本という細い糸を使っている
- ☞ たとえば14中2本は9000mで14gを2本合わせたもの  
ということになる。
- ☞ この算出はデニールという単位である。
  
- ☞ 番手とは糸の太さのこと。番号が大きいほど細くなる。  
ちなみに、ウールの番手に直すと甲斐絹はたて  
が～429番手、よこが～333番手ほど

## 平織り (ひらおり)



- ☞ たて糸とよこ糸が一本ごとに上下する平織り

## 高密度



- ☞ よこ糸を1寸 (約3センチ) の間に200～280本という  
高密度なつくり

## 甲斐絹堂の甲斐絹



## まとめ



**外部の方にも聞かれても答えられるよう  
きちんと覚えておきましょう！！**

## 出典



- ☞ 飯田甲斐絹堂のあゆみ
- ☞ 甲斐絹ミュージアム  
(<http://www.pref.yamanashi.jp/kaiki/>)

(2) 2017年3月22日 ブランディングに関する研究会の開催  
第2回研究会で台東デザイナーズビレッジ鈴木淳氏による講義およびワークショップの内容について研究会を開催する。目的は、甲斐絹のブランド力の強化の方策を見出していくためである。参加者は甲斐絹堂学生。

⑥ 卒業式記念品として甲斐絹名刺入を受注

本学後援会より今年度卒業生へ贈呈される記念品として、合同会社飯田甲斐絹堂製「甲斐絹名刺入」が採用され、2016年3月2日、パンフレット「甲斐絹をたずねて」および甲府市在住数野寛氏による短歌「山梨にて学びし証 甲斐絹なる名刺入れ持ち巣立つ若人」を添えて納品を完了した。

3. 産業史関連の研究の進捗状況報告

今年度の課題：富士工業技術センターは郡内織物業にとってどのような歴史的役割を果たしたのか。

(以下は研究代表者が甲斐絹堂学生と共同の調査研究である。紙幅の都合で要約のみを掲載する。)

研究ノート「山梨県工業試験場について」要約

はじめに

山梨県富士工業技術センターの前身山梨県工業試験場は、明治期から昭和戦前期にかけての産地絹織物産業発展に大きな役割を果たした。本稿では、初期地域産業の構造と抱えていた課題を明らかにするとともに、工業試験場の活動が産地絹織物産業の展開に与えた影響と果たした歴史的役割を考察し、総括する。研究対象は、明治期から昭和前期における山梨県郡内地域の絹織物産業および山梨県工業試験場である。

使用した主要な資料は山梨県『山梨県史・資料編 16・近現代 3』、『同 18 別冊 山梨県富士工業技術センター所蔵 郡内織物関係資料集』『山梨県統計書(明治期各年版)』および山梨県繊維試験場編『山梨県繊維工業試験場創立 70 周年記念誌－郡内機業の歩み』富士吉田商工会議所『富士北麓・東部地域の産業史』である。研究手法は文献調査および関係先への聞き取り等である。

第1章 郡内絹織物産業発展史

本章では郡内織物業の発展について、工業試験場の設立前と設立後を分けて分析した。試験場設立(1905年)以前の県内絹織物業は、全国5位の位置にあり、機業家戸数18,754を数え、この時すでに山梨県の重要産業の地位を占めていた。郡内地域の機業家戸数は県内全体の半数程度であったが、生産額は全体の95%を占めていたとされる。その後県内全体の機業家戸数は減少し、郡内地域に集中的に残存し、その後の郡内絹織物の発展を支えることとなった。

工業試験場設立前後の甲斐絹(海気)の生産額を全国と比較すると表1のようであった。表からは明治28~35(1895~1902)年ごろまで、甲斐絹は栃木県や群馬県でも多く生産されていたことが確認できる。しかし、これらの県では明治

30年代に入ると生産額は次第に減少していくが、山梨県では比較的安定した生産が続き、明治33(1900)年以降、生産量、生産額ともに全国の80%以上を占めるに至っている。他県の甲斐絹生産はこの後衰退していき、明治40(1907)年以降はほとんど生産がみられなくなる。郡内地域で織られた甲斐絹は、この10年ほどの間に全国一のシェアになり、全国的な製品として定着したことが確認できる。

明治年	山梨県		栃木県		群馬県		全国総額	3県総額
	海気	割合	海気	割合	海気	割合		
28	1,480,894	25.9%	2,951,385	51.7%	1,205,702	21.1%	5,709,044	4,432,279
29	2,081,774	57.6%	234,670	6.5%	1,233,710	34.1%	3,614,689	3,550,154
30	2,245,388	44.1%	1,411,268	27.7%	1,415,986	27.8%	5,091,432	5,072,642
31	1,969,290	39.0%	1,441,896	28.6%	1,493,910	29.6%	5,049,201	4,905,096
32	2,435,601	33.0%	1,923,126	26.0%	1,865,408	25.3%	7,386,183	6,224,135
33	5,017,206	67.0%	339,448	4.5%	2,045,624	27.3%	7,484,429	7,402,278
34	2,260,751	51.4%	1,509,928	34.3%	262,740	6.0%	4,402,047	4,033,419
35	977,128	51.3%	260,082	13.7%	305,040	16.0%	1,904,460	1,542,250
36	2,355,790	88.1%	162,289	6.1%	0	0.0%	2,673,873	2,518,079
37	2,147,170	87.6%	80,574	3.3%	17,020	0.7%	2,452,207	2,244,764

出典)『富士北麓・東部地域の産業史』 富士吉田商工会議所 (単位:円)

## 第2章 工業試験場の設立をめぐって

全国各地に工業試験場が設立し始めるのは、1901年の農商務省による府県郡工業試験場及び府県郡工業講習所規定(農商務省令第1号)の制定がきっかけである。山梨県では1905年12月に県令第38号により、南都留郡谷村町の、郡組合立南都留染織学校の跡地に山梨県工業試験場が設立された。当初は機織部と色染部の2部によって事業が開始された。県令第38号の第1条には、この試験場がなすべき業務内容として「一. 原料及製品等ノ分析試験鑑定 二. 工業用機械器具ノ検定, 三. 工業見本品ノ配布, 四. 製作技術ニ関スル質問応答, 五. 巡回講話」を規定している。

試験場の設立当時、郡内の機業家の多くは零細な家内工業組織で、農家の副業の域を出るものではなかった。そのため、各生産者の製品が全体に不揃い、粗製乱造という難点があり、評判を落とす問題があり、業界を挙げた製品の規格統一や染色等の品質向上が求められていた。こうした問題の解決に、県が乗りだし、県主導による組合の組織化、工業試験場の設立が図られたという。

### 第3章 工業試験場の活動

先にも述べたように、工業試験場設立当時、郡内絹織物業が抱えていた最も深刻な問題は、織物の染色堅牢度の低劣さであった。西洋由来の化学染料は1900年前後から郡内でも使われ始め、またたくまに主流となった。しかし、多くの機業家は化学染料の性質、使用方法の正しい知識も無いまま使用していたため、色合いの不均一や変褐色、過度の糊料の付着などの粗悪品が続出し、それがために多くの国内外の販路を失うことも多々あったようである。工業試験場は各染料に関する試験研究を実施し、検定結果の良好な染料を奨励し、その利用法を伝習や講話、実地指導を行い、機業家たちの技術向上を図った。その結果、1916年以降郡内絹織物の生産額は、それ以前の3,800千円台から、20,000千円台へと増加した。

工業試験場の活動を時代ごとに区分すると、明治期には、撚糸・染色・整経を含む織物生産の準備工程、機織工程、仕上げを含む整理工程、図案・意匠工程の全般において新技術の導入と機業家への伝習を実施し、郡内絹織物全体の品質向上を支えた。

大正時代は郡内絹織物業が技術的にもっとも躍進をとげた時期であった。力織機の普及と第1次大戦景気による輸出向け織物が増加したのである。工業試験場の役割は、郡内織物産業の近代化を推進することであった。そのため、各工程における技術力の向上のだけでなく、朝鮮等の輸出先拡大のための視察などを行い、市場開拓という面での支援という役割も新たに加わった。

昭和期は郡内織物業の一大転換期であった。以前の産業構造は一変する。その代表として挙げられるのが生産品種の盛衰と人絹糸(化学繊維)の導入、輸出向け織物の増大である。この時期の工業試験場は新製品の研究と、人絹糸の導入に積極的に取り組み、産地の発展を支えるというものになった。とくに、人絹糸を使用したナチュラル甲斐絹や友禅甲斐絹、絞甲斐絹などの加工甲斐絹が最盛期を迎えた。また、服・袖裏地や洋傘地の交織物が甲斐絹に匹敵する郡内の主力生産品になった。

#### おわりに一総括：工業試験場の歴史的役割

山梨県工業試験場は、第1に製品改良の機能、第2に技術・情報伝達機能、第3に生産高度化機能、第4に生産補充機能、第5に情報収集機能、第6に製品検査機能という役割を果たし、明治期から昭和前期の郡内絹織物業の産地の発展を支えた。また、生産工程にかかる研究活動や伝習活動だけでなく、内外の需要動向に注目し、市場の拡大を図るマーケティング活動を行うなど、幅広い活動を通して、地域の絹織物産業全体を支えたという意義を認めることができよう。

#### 4. 平成 28 年度研究活動の評価と今後の課題

##### (1) 平成 28 年度研究活動の評価

平成 28 年度の本研究事業の活動内容は以下の通りである。産・官・学・金の協力体制が構築され、新しい製品開発と地域のクリエイターとの協働を開始することができたことが第 1 の成果である。また、学生による甲斐絹の知名度向上と普及の活動は、多数の新入生を迎えて、活発に行われたと言えよう。今年度は、学生と共に産業史という側面からの研究を開始することができたのは、第 2 の成果である。これらの成果を得るにあたっては、(株)甲斐絹座、山梨県商工労働部産業支援課、山梨県富士工業技術センター、(株)山梨中央銀行の各参加団体及び研究会参加メンバーによる支援が不可欠であった。また、本研究事業の準備段階では本学の共同研究者による事業への積極的な取り組みが重要な役割を果たしたことを申し添える。

##### 1) 研究会の開催

本年度内に開催された研究会は 2 回で、第 1 回目は新製品の試作品の合評会、第 2 回目は甲斐絹のブランディングのための講演とワークショップを実施した。いずれの研究会にも、産・官・学・金の共同研究参加者ばかりでなく、一般からの参加者を得て、活発で実りのある研究会を実現できたと評価されよう。とりわけ、甲斐絹扇子・団扇という新製品の開発は、当研究事業の新しい展開に大きく貢献をしたと評価したい。

##### 2) 甲斐絹堂の活動

既述の詳細報告にあるように、今年度の飯田甲斐絹堂は、富士吉田見学 2 回、地場産業まつりへの出展 2 回、甲斐絹関連の勉強会 2 回、それぞれ開催するとともに、卒業式名刺入れの受注をするなど、活発に活動し、甲斐絹の知名度向上と伝承活動の蓄積という点で貢献したと評価できよう。

##### 3) 産業史関連の研究への着手

本研究授業の新たな柱である産業史研究において、今年度の目標である山梨県の紡織関係の文献の収集や調査を実施し、研究ノートを上梓した。今年度は、その初年度として、今後の研究の進化のための基礎調査ができた。

##### (2) 今後の課題

今後も、平成 28 年度と同様、産・官・学・金の連携により研究活動に取り組む予定である。今年度 2 回の研究会の開催回数を、次年度は 3 回程度に増やし、地域連携の強化を図りたい。

今後の課題として、今年度における達成が不十分であった、県内の絹織物復活

に向け新たなムーブメントを担う、若手企業家との研究交流を通じた絹織物復興ネットワークの形成という課題の達成へ向けた連携活動を活発化したいと考える。今年度開発した甲斐絹扇子・団扇のブランディングの活動を駆動軸として、進めていくこととする。